

「日本なかりせば」

21世紀になろうとするとき、高山正之氏の「情報鎖国・日本————新聞の犯罪」が上梓された。アメリカによる「日本企業に対する意味不明の因縁」や「日本が憎い米紙と朝日」など、いずれまとめるつもりであるが、今回は、「マハティールの期待を裏切る日本」が気に入った。……新聞やテレビは真実を報道しない、という面でも納得できるものである。

マレーシアのマハティール首相は、ボクらから見れば尊敬に値する、しかもアメリカにいらまれたら今後、国家の運営にも支障が出るだろうことも承知の上で日本に期待し、東南アジアや東アジアのリーダーになって欲しいために、「日本なかりせば」を講演した。

東南アジア諸国は、長く欧米の植民地として冷遇され、ベトナムはアメリカとの戦争で大量の枯葉剤を撒布され、南北に分断されていたのを統一したのは1975年である。インドネシアは、戦後のこのこと戻ってきたオランダとの闘いで80万人の犠牲をだしたが、独立の道を選んだ。他のビルマ（現ミャンマー）もインドもマレーシアもすんなりと独立したわけではない。

日露戦争で日本が陸軍は互角かわずかに勝ったか、といった程度であったが、バルチック艦隊を壊滅させたのを知ってはいたが、その目を見た者は、ごく限られた満洲の住人だけだった。ところが、大東亜戦争では、東南アジアの至る所で、それまで神のごとくに偉そうにしていた白人たちが慌てふためき、白旗を掲げて降参するのを、「自分の目」でたしかめた。「みていて痛快だった」とのちになって述べている人の話が、あちこちで残っている。……その結果、彼らの中に白人なにするものぞ、という勇気がわきでてくるのは当然だろう。日本敗戦後、どこの国でも独立運動が盛んになっていったのは歴史の蓋然である。日本は大東亜戦争でアメリカに完膚なきまでに敗れたが、その精神や影響、実際にその目を見た事実は消せない。永遠に記憶に残っている。

1980年代後半になって、東西冷戦構造が崩壊し、これからは同じアジア人同士、欧米に干渉されたり、代理戦争まで押し付けられたりすることなしに、協力してやっていく時代だというのがマハティールの考えである。そこで、1990年にEAEG（東アジア経済グループ）を提唱した。

ヨーロッパでは、EC（現EU欧州連合）、アメリカもカナダ、メキシコとともにNAFTA（北米自由貿易協定）を立ち上げていたから、アジアもASEANに加えて日本、韓国、中国も含んで東アジアの経済共同体を考えてもいいのではないか、というものである。

ところがアメリカが激しく反対した。なぜなら、アジア人だけになると、白人の入る余地がなくなり、人口比からみてもアジア人の経済共同体の方が大きくなる。さらに、アメリカ自身のうまみが全くなくなってしまう。さらにさらに、あれほど完膚なきまでに潰したはずの日本が不死鳥のように経済分野でよみがえり、しかもそのリーダーとなるなど、とんでもない話である。(このあたりが、すでに述べた、**アメリカは日本を怖れている**、ことの証左である。) もうひとつは、この経済共同体が進化していくと軍事同盟にも至りかねない。だから、親米のスハルト大統領に説得させたり、オーストラリアも白人国として(つまり裏に欧米がいる)参加させろ、などとしゃしゃり出てくる。マハティールは、自分たちは NATO をつくっているのではないかと憤ったがなんとか我慢し、EAEC (Cは、会議：カンファレンスあるいはコーカス：アメリカインディアン の酋長の集まり)でもいいとまで譲歩したが、アメリカは納得せず、ついに肝腎の日本の外務省に命じ、APECを作った。日本の外務省の役人が、「この構想は日本外務省の発想なんですよ」それをクリントン様が認めてくださった、マハティールを無視してよかった、などとバカなことを言う。・・・考えたらわかるやろ。マハティールは日本の言うべきことを代わりに言ってくれているのじゃないか。

これではアメリカ追随のみならず、腰ぎんちゃくで露払いしかしていない。橋本龍太郎通産相もオーストラリアがはいることを煽動し、河野洋平外相はマハティールを罵り倒す。・・・これでは、日本には外交がなかった、と言われても仕方がない。・・・挙句は、ASEAN 欧州連合会議での日本はずしにつながるのである。

マハティールはその日本の動きに呆れる。そして、アメリカの傀儡となって恬として恥じない姿に憤りを感じながら 1992 年 10 月、香港で開かれた世界経済フォーラムで歴史的な公演をする。

日本人よ、惰眠をむさぼらず、目覚めよ、という忠告の演説は一般に「日本なかりせば」として知られる。以下、サピオ誌 (99 年 4 月) が掲載した全文である。

それにしても、マハティールの勇気には敬意を表する以外にない。アメリカは、というよりルーズベルトは、日本が嫌いで、(恐れてもいるから) 未来永劫日本叩きをするつもりで、日本とどこかの国とが親密になることをきらっていた。だから、「日本」は消滅すると世界中が信じていた。同じ枢軸国のイタリアや、何の関係もないスイスまで賠償金をせしめている。そういう雰囲気のおかげで、日本頑張れとエールを送っているのである。

マハティール演説「日本なかりせば」

過去のヨーロッパ中心の世界では、東アジアとは即ち極東だった。そして極東は、異国情緒あふれる中国と龍のイメージ、お茶、阿片、高級シルク、風変わりな習慣をもった珍しい人々など、奇妙で神秘的な印象を思い起こさせる場所だった。

いまや極東は東アジアになり、気の毒だがヨーロッパのロマンチストの興味の対象は減った。その代わりに政治家とエコノミストの関心の的になっている。

ヨーロッパがアジアに対して懸念を抱いている事実は、この地域が、すでに今世紀前半の日本軍国主義以上に深刻な脅威になっていることを示唆している。こうした見方の底流には、不信感と恐怖がある。その理由は、東アジアの人々が自分たちとは異なっている、つまりヨーロッパ人ではないという点にある。

そのため、第二次大戦後の枢軸国であったヨーロッパのドイツとイタリアが平和国家となって復興、繁栄するのは応援、歓迎されたのに、同じように平和国家となった日本と「極東の小さな日本」の経済発展はあまり歓迎されないように見える。

それどころか、ヨーロッパとヨーロッパ社会を移植したアメリカはともに、様々な手段を使って東アジア諸国の成長を抑え込もうとしてきた。西側の民主主義モデルの押し付けにとどまらず、あからさまに東アジア諸国の経済の競争力を削ごうとしてきた。

これは不幸なことである。東アジアの開発アプローチから、世界は多くのことを学んできた。日本は、軍国主義が非生産的であることを理解し、その高い技術力とエネルギーを貧者も金持ちも同じように快適に暮らせる社会の建設に注いできた。

質を落とすことなくコストを削減することに成功し、かつては贅沢品であったものを誰でも利用できるようにしたのは、日本人である。まさに魔法も使わずに、奇跡ともいえる成果を創り出したのだ。

日本の存在しない世界を想像してみたらよい。もし、日本なかりせば、ヨーロッパとアメリカが世界の工業国を支配していただろう。欧米が基準と価格を決め、欧米だけにしか作れない製品を買うために、世界中の国はその価格を押し付けられていただろう。

自国民の生活水準を常に高めようとする欧米諸国は、競争相手がいないため、コスト上昇分価格引き上げで、賄おうとする可能性が高い。社会主義と

平等主義の考えに基づいて、労働組合が妥当だと考える賃金を、いくらでも支払うだろう。

ヨーロッパ人は労働側の要求をすべて認め、その結果、経営側の妥当な要求は無視される。仕事量は減り、賃金は増えるのでコストは上昇する。貧しい南側諸国から輸出される原材料品の価格は、買い手がきたがわのヨーロッパ諸国しかないので最低水準が固定される。その結果、市場における南側諸国の立場は弱まる。輸出品の価格を引き上げる代わりに、融資と援助が与えられる。

通商条件は、常に南側諸国に不利になっているため、貧しい国はますます貧しくなり、独立性はいつそう失われていく。さらに厳しい融資条件を課せられて〈債務奴隷〉の状態に陥る。

北側のヨーロッパのあらゆる製品価格は、おそらく現在の3倍にもなるため、貧しい南側諸国はテレビやラジオも、今では当たり前家電製品も買えず、小規模農家はピックアップトラックや小型自動車も買えないだろう。一般的に、南側諸国は今より相当低い生活水準を強いられることになるだろう。

南側のいくつかの国の経済開発も、東アジアの強力な工業国家の誕生もありえなかったであろう。多国籍企業が安い労働力を求めて南側の国々に投資したのは、日本と競争せざるを得なくなったからに他ならない。

日本との競争がなければ、開発途上国への投資はなかった。日本からの投資もないから、成長を刺激する外国からの投資は期待できないことになる。

また、日本と日本のサクセス・ストーリーがなければ、東アジア諸国は模範にすべきものがなかっただろう。ヨーロッパが開発・完成させた産業分野では、自分たちは太刀打ちできないと信じ続けただろう。

東アジアでは、高度な産業は無理だった。せいぜい質の劣る模造品を作るのが関の山だった。したがって西側が懸念するような「虎」も「龍」も、すなわち急成長を遂げたアジアの新興工業地域（NIES）も存在しなかっただろう。

東アジア諸国でも立派にやっていけることを証明したのは日本である。そして他の東アジア諸国では、あえて挑戦し、自分たちも他の世界各国も驚くような成長を遂げた。

東アジア人は、もはや劣等感にさいなまれることはなくなった。いまや日本の、そして自分たちの力を信じているし、実際にそれを証明してみせた。

もし日本なかりせば、世界はまったく違う様相を呈していただろう、富める北側はますます富み、貧しい南側はますます貧しくなっていたと言っても過言ではない。北側のヨーロッパは、永遠に世界を支配したことだろう。マ

レーシアのような国は、ゴムを育て、錫を掘り、それを富める工業国の顧客の言い値で売り続けていただろう。

このシナリオには、異論もあるかもしれない。だが、十分ありうる話である。日本がヨーロッパとアメリカに投資せず、資金をすべて国内に保有していたらどうなるかを想像すれば、その結果は公平なものになるのではないだろうか。ヨーロッパ人は、自国産の製品に高い価格を払わねばならず、高級なライフスタイルを送る余裕がなくなるだろう。(中略)

実のところ、ヨーロッパ人は、身分不相応に暮らしている。ヨーロッパ人は、仕事量が非常に少ないにもかかわらず、あまりにも多額の賃金を受け取っている。ヨーロッパは世界の国々が、この浪費を支持してくれると期待することなどできない。ヨーロッパ諸国は、国民のために高い生活水準とより健康的な環境を求めているが、犠牲を払おうとはしない。

「ヨーロッパは、もっと低い生活水準を受け入れ、環境を維持すべきだ」と提案されたとき、ヨーロッパ諸国は激しい不快感を示した。だが、ヨーロッパは、北側諸国の環境維持に必要だという理由で、貧しい国々に国内の天然資源を開発しないように求めている。それは要するに、「貧困国は富裕国のために犠牲になれ」ということである。しかし、豊かな国々は、何の犠牲も払おうとしない。

アジア諸国が「ルックウェスト」で欧米に指導やモデルを仰いだ時期があった。いまやヨーロッパが逆に「ルックイースト」で、逆にアジアにそれらを求める時期が来ているのかもしれない。

皆さんが私を、東アジア人とみなすか、東南アジア人とみなすかはわからない。どちらであれ、私は自分の見解が「私は東南アジア人であるだけでなく、発展途上国の出身でもある」という事実に影響を受けていることを認めなければならない。

マレーシアは、ある野心を抱いている。私たちは、いつの日か先進国になりたいと考えており、不必要に妨害されて不満を感じている。私たちは自由貿易と公正競争の妥当性を信じている。

ASEANの経験によって、友好的な競争と互いに学び合おうという意志があれば、経済成長を促進することができるとわかった。東アジア諸国が競争しながら学ぼうという意志をもっていれば、同じ結果を達成できるだろう。ヨーロッパ～東アジア間の公正競争と協力を発展させれば、すべての国々が繁栄するうえで役立つだろう。

たとえヨーロッパやアメリカが保護主義を採用しても、東アジアは保護主義に頼らないだろう。東アジアには競争力があり、そのことをはっきりと証

明している。

たとえば1960年には、東アジア全体のGDPはECの42%、アメリカの23%、NAFTAの21%だった。1990年にはそれがECの67%、西ヨーロッパの47%、アメリカの73%、HAFTAの64%に達した。

東アジアの域内貿易も、絶対額と世界貿易に占める割合の両方で成長している。東アジアは、保護主義に頼ることなく、しかも多くの障害をものともせず、これを達成したのである。

その過程で東アジア諸国は、自国民だけでなく世界中の貧困者の生活の質を高めた。東アジア諸国の成功は、魔法のおかげではない。日本が成し遂げたことを東アジアの他の国々も程度の差こそあれ達成することができたのである。同様に、ヨーロッパもそうすることができる。

この成功の主な要因は、高い生活水準を維持する余裕のない時期には低い生活水準を受け入れようとする意志である。東アジア諸国は進んでそうしている。無理して高い生活水準を維持すれば、競争力を失ってしまう。

むしろヨーロッパ人のほうが、自分たちのやり方が賢明な者かどうか自問し、現実を受け入れなければならない。そうすれば、ヨーロッパと東アジアは相互の利益のために協力することができる。

ただし、どのような事情があっても、東アジアの成長を止めることはできない。東アジアには、発展する権利があるのだ。

(欧州・東アジア経済フォーラム 1992年10月14日 IN 香港)

この講演(演説)、マハティールの主張の素晴らしさは、高山氏に言わせると、「歴史を実に公平に見ている」ことだ。日本と、それまで「政治的禁治産者」と見下されてきたアジア諸国が、独立後に示した力を素直に見つめた。その上で、それまで欧米が禁句にしてきたこの世紀における日本の歴史的 position、評価をはっきり口にした。

この演説では、話が進むにつれ、会議場にいた欧米諸国の代表が何人か席を立ち、あるいは憤然として靴音高く退席していった、「という。」……なぜ「という」か。日本から派遣された記者や香港駐在の特派員たちが、誰一人マハティール演説の神髄を日本のメディアに報道しなかったからである。朝日新聞の記者が一報したが、半年後に「マハティールの情念」を書くまで真実が報道されなかった。

他の新聞のみならず、NHKもそういう演説があったことを報道しなかった。

唯一、朝日新聞の船橋洋一が中途半端に報道したのだが、サマセット・モームが日本人を表現するのに頻用した、Sly and obsequious（へらへらしながらずるく立ち回る）日本人像である。そういう見下し、軽蔑した言い方をひとつの民族に・国家に使うのはまさに人種差別であるが、そのニュアンスには、劣等民族のアジア人のくせして小癪にナマをやる、という腹立ちの意識も含まれている。そういう100年以上も前からのかびの生えた日本蔑視に立った論調を、日本人のジャーナリスト（船橋のこと）が日本人の読む新聞に偉そうに書くものだろうか。日本人の見方ではなく、欧米人の見方で日本を表現する。船橋はバカだから、というのもあるが、他の報道機関の記者も同じく日本人を見下している。

EAEG構想がマハティールの口から語られたあと、それをつぶしにかかった外務省など、言葉を選ばなければ「国賊」と言っている。

自らを欧米人に匹敵すると誤解している記者たちは知らないだろうが、1998年度ノーベル経済学賞を受賞したインド人のアマーティア・センが‘99年にシンガポールで講演した、ことも報道しない。そもそもセンについて知らないのだろう。・・・その重要さを理解していないのである。

アマーティア・センは、マハティールの主張を経済学・哲学の分野から語ってきた。彼は言う。アジアが日本を先頭に戦後、香港、シンガポール、台湾など4匹の巨龍、さらにそれを追うように登場したマレーシア、韓国など小さな龍が、身の丈に余る経済発展を成し遂げたのは、「人的資源＝教育の重要性を、日本が歴史を通じて示し、指導したことにある。」と。さらにいう。「欧米はそれを、白人社会が行った行動や理論の物まねにしか過ぎないと見下すが、日本の示し、指導したパターンは白人たちの理論を超えて、豊かでもない多人種、多宗教、その他の様々な社会制度が混在するアジアに自由市場化を生み出し、経済発展を実現した。」

マハティールとアマーティア・センという当代の卓抜した2人の意見は、ここで一致している。

ボクが見るところ、猿真似というが、では欧米は植民地に学校などの建設をしたのか！教育を充実したのか！ 搾取しか考えない連中がしてきたことは、共通語を奪い、苛酷な税を課し、独立の機運を摘み取ってきただけではないか。植民地が独立することにより、現にヨーロッパ諸国は、貧乏で貧相な国に落ちてしまったではないか。

マハティールは、命を賭けて日本の代わりに主張してくれているのに、当の日本は、橋本や河野のみならず、みんなで彼の足をひっぱり、邪魔しかしてい

ない。これでは「日本に外交がない」と言われてもしかたがない。

現に「外交官が国を亡ぼす」などの名著がある。

国連（単なる連合国）を後生大事に信奉している政治屋がいるのだが、まともな裁定もできないことが多い。国連の言うとおりに動くのではなく、国連を動かすのが政治家の仕事である。

アメリカなどの思惑に基づいた情報操作が常におこなわれているのに、悲しいことにそうした作為に乗せられた嘘が、何も考えない日本人特派員を通じて日本の新聞に載る。この特派員たちが、自らを欧米先進国の代理と勘違いして、無知な日本人を教え導く、などととんでもない誤解をしているのである。

2000年には、マハティールは、「いつまでも過去の謝罪を繰り返すべきではない。アジア諸国が期待しているのは、謝罪ではなく、アジアでのリーダーシップである」とまで言ってくれている。それでも、日本の新聞やNHKはこれを報道しない。

「日本なかりせば」の歴史的演説から20年。初めてWGIP（戦争罪悪情報操作）を無視できる安倍総理が誕生した。首脳外交をはじめとして、以下、別の稿に譲るが、「謝罪」とばかり言うのは、中国と韓国だけで、安倍さんは、「条件を付けなければ会ってもいい」と受け流している。……ひょっとすると、「会ってもいい」ではなく、「会ってやってもいい」くらいに考えているのではないか。その戦略・政略眼は、あるいは日本憲政史上最大の宰相になるかもしれないことを予感させる。アメリカ高官のだれかが、安倍さんの戦略眼について、しばらく考えて「第二次大戦時のチャーチルに匹敵する」あるいは凌駕しているのかもしれない。

2018. 01. 17.